

文化的背景 — 応用医療人類学の知見から

● 人間の行動と文化

人は集団で生活し、集団の中で特有の文化を発達させている。食事の作法、衛生のあり方、仕事の仕方など、私たちが自由に選択して行っていると思っっている日常行動の多くは、帰属している集団の文化によってかたちづけられていて、世界にはそれぞれの文化に応じたさまざまな行動様式が発達している。

応用医療人類学は、人を総合的に研究する人類学の知見を、人間の保健医療や健康維持の活動に応用する学問であり、病気の予防、治療、健康の促進のために、人間の行動の背後にある文化に着目することが必要だと考える。

「風邪」を例にとってみよう。熱が出て、咳もあり、悪寒がする場合、病院に行って、医師から流行している風邪だと言われ、薬を処方されたという人、病院に行く時間がないため、薬局で市販の薬を買って対処したという人、症状が重くなり、学校や会社を休んで家にいるように周囲から言われる人もいる。社会学の用語では、周囲の人が病気の人に与える役目のことを「病人役割 sick role」と言う。病院に行き、仕事を休むことは、周りの人から期待される役割である。他にも、病人がとるべき行動はすべて、その人が所属する文化において定められている。

● 応用医療人類学の方法

応用医療人類学の研究では、現場における観察やインタビューの資料を使い、(1) 人が病いをどのように認識しているか、(2) 人が病いをどのように経験し、対処しているか、(3) 保健医療の制度はどのようにお互いに関連づいているのか、(4) 病気はどのように治療され、治療の成果はどのように評価されるのかという、大きく分けて4つの側面から、先に述べた健康、病気、医療にかかわる人間行動の文化的背景を明らかにしていく¹⁾

● 生活習慣病の文化的背景

生活習慣病を例にして考えてみよう。日本では、がん、心疾患、脳血管疾患、糖尿病、高血圧などの生活習慣病は、一般診療医療費のおよそ3割を占めている疾病である。「生活習慣病」という名称が示すように、食生活、運動、休養、喫煙、飲酒など、個人の生活習慣が深くかかわっている疾患である。この病気の文化的背景を知るために、応用医療人類学では、次の(1)から(4)に述べるような問いを立てて考察する。

- (1) 現代の日本人の生活様式に潜んでいる生活習慣病のリスクは何か。
- (2) 心臓や脳血管障害、高血圧、がん、糖尿病はどのように定義されているか。
- (3) 日本では、どのような保健医療の仕組みのもとで、糖尿病や高血圧を診断・治療・評価しているか。
- (4) 患者自身は、これらの病気をどのように認識し、どう対処しているか。

応用医療人類学では、生活習慣病に対する医学の知識、一般社会の認識、実際に病気を患っている人の認識はそれぞれ異なっていると仮定し、「疾患」「病気」「病い」という3つの概念で、それぞれがよって立つ知識や信念(「解釈モデル」)を明らかにする²⁾。現代医学はもとより、はりやマッサージなどの伝統医療もその対象となる。このことはその社会における医療の知識と病気の解釈モデルの多様性をあらわしている³⁾。

患者の活動の範囲も人によってさまざまである。たとえば、生活習慣病を患うと、病院での治療やリハビリテーションに加えて、個人が家庭で行うセルフケアが重要になってくる。セルフケアの活動は、同じ病気を経験している「自助グループ self-help group」の活動に発展することもある。自助グループは、保健医療の専門家によって構成されるものではなく、一般の人々によって構成されており、ヘルスケアを体系づけるもっとも大きな要素となっている。患者・家族は定期的集まり、自分たちの価値観や信念を共有し、活動する。全員で情報を共有し、励ましあい、苦悩を共有することから、「苦悩の共同体」とも呼ばれている^{4,5)}。

● 環境と人々の営みのグローバル化

人の生活習慣は環境条件によって強い影響を受ける。そのため、病気の原因が個人の生活習慣だけにあると断定することはできない。たとえば、現代社会では、社会・経済・文化のグローバル化にともなって世界の人々の生活様式が均質になっている。伝統的な食事の文化に、ジャンクフードやファストフードが入ることにより、あらゆる国で肥満や糖尿病が増えている。具体的には、タンパク質や脂肪中心の食事や不規則な生活、各種のストレス、便秘などは腸内細菌叢に影響を与え、高血圧や肥満などの生活習慣病を引き起こすといわれる。

その一方で、食料が安全、安心に供給されない状態や、戦争や紛争や災害などによって、住み慣れた土地を追われて生きている人びとの栄養失調は深刻である。さらに2020年のはじめから現在まで、新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るっている。現代に生きるわたしたちは、健康、保健、医療のあり方を考える際に、世界各地で起きている環境の変化とその中での人々の営みのグローバル化の影響も考慮する必要がある⁶⁾。

文 献

- 1) Kielmann, K.: Introduction to Applied Medical Anthropology, in Principles of Social Research, J. Green and J. Browne eds, pp.135-144, Open University Press, 2005
- 2) Kleinman, A.: The Illness Narratives: Suffering, Healing, and the Human Condition. Basic Books, 1988 江口重幸・五木田紳・上野豪志訳: 病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学. 誠信書房, 1996
- 3) 道信良子: 「健康と医療」『文化人類学』第4版, 波平恵美子編著. 医学書院, 2021
- 4) Helman, C.: Culture, Health and Illness (5th ed). Oxford University Press, 2007.
- 5) ヘルマン, セシル・G: 『ヘルマン医療人類学: 文化・健康・病い』辻内琢也監訳. 金剛出版, 2018
- 6) 道信良子: 『ヘルス・エスノグラフィ』医学書院, 2020

(道信 良子)